

★ 地域売上げ"№.1"。弾き・飛び・耐久性にこだわりました。

CHAMPION 第1種検定合格球

¥3,200 → ¥2,300

★ ゲーム練習に最適。高校生に大人気！

ATTACK 試合球(水鳥羽使用)

¥2,600 → ¥1,800

★ 基礎打ちからゲームまで使えるオールラウンドシャトルです。

FIGHTER 練習球(水鳥羽使用)

¥2,200 → ¥1,600

★ 価格と耐久性がウリです。

BRONZE 練習球(水鳥羽使用)

¥1,600 → ¥1,200

★ 家庭婦人に大人気！ヨーロッパ生まれのシャトルです。

RSL NO.1 Tourney I.B.F.公認球

¥2,300 → ¥1,800

ご注文数に応じて、さらに割引価格でご提供いたします。

(株)I.E.ネットワーク

〒272-01 千葉県市川市南行徳 1-16-21

TEL : 047(395)6044

FAX : 047(395)9709

受付時間：月～金 AM10:00～PM10:00
土 PM 2:00～PM 7:00

学から埼玉栄高へと転任。その間には、伊藤雅弘(現NTT北海道監督)を皮切りに、五輪代表の榎匡子現姓・松野、今年度の全日本チャンピオン須賀隆弘、井田貴子ら、加藤監督のもとから育っていった選手は枚挙にいとまがない。この実績からスカウトをしなくても、加藤監督を慕い集まってくる選手は後を絶たず、選手一人ひとりがつねに勝利への強い意志を持って練習に臨んでいる。埼玉栄の強さには、そんな背景が存在しているのである。

「選手は、3年間かけて育てる。どの子も『これをいわないと強くなれない』というものを持っていて、そこから、それを一つひとつ教えていくんです。たとえば、サーブのできない子にはまずサーブから始める。別の選手にはストレート

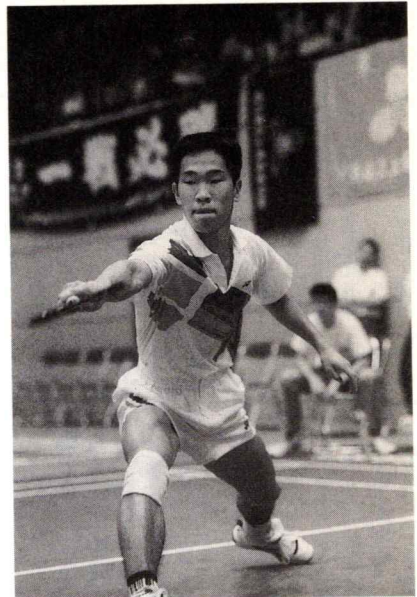
のスマッシュを指導するということに、一つずつ積み重ねていくわけですね。ですから、途中で『これはこうやるんだよ』などと、ま



最後は開き直って優勝を決めたエース岩脇

だ私とその子に教えていけないことを他の方に指導されると困りますね。まだ教えてほしくないことですから。指導には順序があるんです。そのためにはとにかく、選手を毎日見てやること。それが大切ですね」

男子の優勝校・上尾の前監督である阿部秀夫氏(現日本ユニシス監督)も、埼玉栄の強化に当たった仲間の一。さらに越谷南高の大高史夫監督や小松原高の埴山好和監督ら、全国を制してきた指導者たち。男女ともに埼玉栄に強豪校が名を連ねているのは、そんな土壌があったからこそ。もちろん、現在も県内のトップジュニアたちを集めて定期的に講習会を開き、育成に努めているという。埼玉には、勝利の力気が眠っている。▽



中西の復帰なるかが最大の不安材料だった

指導者が多く、いい意味のライバル意識で各校が切磋琢磨しているという、バドミントンの力を伸ばしやすい土壌もある。
恵まれた土壌に熱心な指導の力が加わって伝統が生まれ、意識の

高い選手が集まり、さらに卒業生が全日本のトップ選手となつて後輩たちに刺激を与え、よりよい練習を生み出す。こんなところに、上尾高校の勝利の方程式の答えは潜んでいるのかもしれない。

TACTICS FOR THE VICTORY

個々への細やかな指導 埼玉栄高の場合

「今年のインターハイは、私にとつて、初めて襲ってきた試練でした」

と勢いで勝った。その流れがずっと続き、5、6月の試合はこの流れで勝っていったんですね。でも

女子団体で埼玉栄高を2連覇に導いた加藤勝監督は、そう振り返る。というのも、チームの状態がよく、選手を強化するというよりも、その勢いをとどめることを必要とされた年だったからだ。長い指導者生活のなかでも、こんなことは初めての体験だったという。「現3年生の選手が昨年、上級生に負けずに活躍して、国体、選抜



埼玉栄高・加藤勝監督

それが、7月にはピタツと止まった。これだけ勝ち続けたということと、今度は逆にそれが選手たちにプレッシャーとなつていったようなんです」

例年に比べ冬のトレーニングも少なく、きちんとした強化態勢をとらなくても勝てたことで、課題にわだかまりが残った。それが顕著に現れたのが、エース岩脇史だった。

「強くするために腰を据えてじっくりとやるべき時期がなく、積み重ねたものをもう一度洗い直すことをやりきれないうちに、大会を迎えてしまいました。私の育成のすべてを出して教えることができなかったことが、シングルスでの結果（ベスト16）を招いてしまった。本来ならば勝てたはずなのに」

それでも、団体優勝を飾ったのである。
「7月は調整に入ったのですが、あの子たちの開き直りはすごかったですよ。練習はできなかったんですけどね」

男子の優勝校・上尾とは対照的に、ここ埼玉栄ではインターハイのための特別練習といったものは見当たらない。普段の練習も、専用の体育館がないため練習場探しから始まり、ランニング、サーキットトレーニング、コート練習と公立高校同様、どこにでも見られる練習風景である。その点に関して、以前のインタビューで加藤監督はつぎのように答えている。

「2対1をとってみても、やらせ方。問題は集中力ですよ。ダラダラと続けられるのは集中してないから。そんな練習を重ねても効果はない」

ここでいう2対1とは、1の選手に対して2人の選手が替わるがわるシャトルを繰り返す、2の側は2列になつて4つのコートをつぎつぎローテーション。その間、1の選手はその場で打ち続けるという埼玉栄独自の練習法のこと。

現在、全日本チャンピオンとして君臨する三洋電機の井田貴子が5分てつぶれたという伝説のハードな練習だ。

しかし、それだけでは勝利の決定打はまだ見えてこない。それもそのはず。すべての根底に脈々と受け継がれる埼玉県の伝統、加藤監督自身の存在があるからだ。

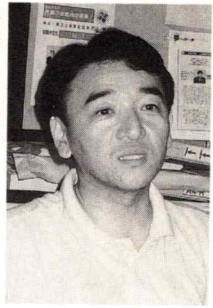
監督と力を合わせて関東大会を創設し、翌年、全中をスタートに導かせた人なのだ。
指導者としてはその後、栄進中

加藤勝監督といえば、知る人ぞ知る、埼玉県のバドミントン界の開拓者であり、ジュニア育成の父的存在。埼玉大教育学部在学中にプレーを始め、昭和42年に開かれた埼玉国体をきっかけにバドミントンのとりことなり、越谷市立中央中学に赴任と同時にバドミントンの指導を始めた。

昭和40年代当時といえば、まだ全国中学校大会すら開催されていなかった頃。ましてや埼玉県には県大会すらない時代だった。しかし、地元では国体の開催が迫っていた。なんとか強化しなければ、と盛り上がりてきたなか、加藤監督が中心となり、県大会を初めて開催させる。そして、その3年後には、栃木・小山城南高の遠井稔



団体優勝を果たし歓喜に沸く埼玉栄チーム



上尾高・関根務監督

インターハイを制覇した。2年ぶり、5度目の優勝である。そこで浮かんでくるのは「日本のトップ選手＝インターハイ強豪校出身」という構図だ。この図式にはどのような関係があるのだろうか。

「インターハイは特別な大会。インターハイを取ってこそ、高校王者なのだと思います」という関根務監督のもと、上尾高校のインターハイへの挑戦は、毎年新しいチームを構成したときに始まる。

目標を立てて選手を配分。3ダブルス、4シングルスで理想としてチームオーダーは練られる。そして練習では、①羽根をきちんとつなげる②コートの中の体力を鍛える③ラリー能力をつける——という3点が大きな課題。

とくにトレーニングといったようなことは行なわれない。というのも、コートの中の体力と、ウエイトトレーニングなどで鍛えられた体力とは異なるものと考えているからだ。コートで粘れる体力をつけることを重視し、またラリーを切りにいけるよう、監督は選手一人ひとりに細かく目を光らせている。

その一方で、つねに監督が意識

に置いているのは「練習環境を整える」ということ。

「大学、実業団、どこへでも出かけていきますよ。今年の春には韓国へも遠征に出かけ、向こうのトップ選手と合同練習もしてきました。とにかく、選手たちの実戦経験を豊かにしてあげたい。条件を揃えてあげたいんです。そのため、の労をいといませんよ。そういうこと（練習試合）はうちがもつともやっているのではないでしょう」（関根監督）

圧巻は、インターハイに向けた特別練習だろう。

「試合の期間は5日間であるという。試合形式が団体戦、ダブルス・シングルスである。ことなどいろいろなことを想定した合宿を組むんです。並行試合での試合間隔なども含めて、対戦相手は想定できますから、その試合内容を想定し、見合った学生を見つけてきて最後に試合を組みます。その学生は大学のトップだった卒業生だったり、いろいろですね。それがドンビシヤと当たることもありま

すから」
さすが強豪校といわれるチームの練習。死角のない勝利への作戦はもろろん、監督の手によって集められ、分析され、強化練習によって完成されていくのである。

では、具体的に今年はどういう勝利へのプロセスは描かれていたのでしょうか。

「今年のインターハイは中西の復帰が最大のテーマ。振り返れば、実に厳しい1年でした」
ここで語られている中西とは、

もちろん個人戦のシングルスをも制した同校のエース・中西洋介のことである。その中西がケガを負ったことが、関根監督の構想をくわせた。

「なにしろ、まったく練習のできない状態でしたからね。そのためチーム構成ができなかったし、集中して練習に取り組みませんでした。中西が単複できないときにはどうするか。中西なしのダブルスをどう作るか。もうひとつ、信頼のできるシングルスはどうか。この3点が、寝てもさめても、ずっと頭の中を駆けめぐっていましたよ。選手には怖い顔を見せながらも、内心は焦りていっぱいでしたね（笑）」

しかも、監督の耳には「〇〇にすくい選手がいる」「中西はもう駄目だろう」などと、周囲からさまざまな雑音が入ってくる。その不安に感われないように、冷静に強化を組むことが、例年と違って難しかったという。

そんな上尾チームに、優勝をね



優勝が決まった瞬間、躍り上がる上尾ベンチ

「挑戦者という気持ちを全面に出して戦った試合でした。なんとか常総学院に勝ったかったです。準決勝で対戦して勝ち、決勝では八代東に敗れるという結果でしたが、とにかく選手たちには常総を破ったことをはめてやりたかったですね」
そうして迎えた夏。チームは3ダブルス、5シングルスと、理想以上のメンバーが揃った。

「今年の選手層はもとより揃って

いましたし、分担もよくできた理想のチームでしたからね。なんと

しても優勝させなければいけないと思っていました。とはいえ、選手たちはみな優勝経験も多く、

地力があります。苦しい場面はある

のでしようが、中西を軸としてや

っているだろうと思っていました

たね。また、中西に関しては、勝

ち上がるまで3冠の負担をかけない

よう、余力を残してやりたいと

思っていました。団体の中西にシ

ングルス勝負がなかったのは、よ

かったですね。心配していたケガ

もかなり回復し、80%ぐらいの状

態でした」

県立高校という立場上、積極的な選手のスカウトはできない。しかし、トップ選手を育ててきたという「伝統」はこんなところで効力を発揮する。あすのトップをめざす目的意識を持つ選手が、伝統に引きつけられ、スカウトしなくても集まってくるからだ。

それだけではない。ここ埼玉県にはバドミントンに情熱を燃やす

「特別企画」

インターハイ勝利の方程式

取材・文／永田千恵



この夏、京都インターハイで団体アベック優勝と、大ブレイクした埼玉。もともと同県の高校バドミントンは大阪、熊本、石川、富山らと並び全国でも高いレベルにあったが、この快挙で満開の時期を迎えたといえる。高校生最大の夢であるインターハイを制するまでには、どんな練習法や戦略があったのか。そして、埼玉県の強さの秘密とは？ 2年ぶり5度目の優勝を飾った男子・上尾高の関根務監督と、2連覇をなしたげた女子・埼玉栄高の加藤勝監督の話から「勝利の方程式」を探る。

TACTICS FOR THE VICTORY

死角のない勝利への作戦 上尾高の場合

全日本総合という日本のトップを争う選手権。そのトップ4といえはもちろん、現在の日本を代表するバドミントンプレイヤーである。そのなかの3人、須賀隆弘、山田英孝、町田文彦には共通点が

ひとつある。おわかりだろうか。年齢こそ違うが、ともに埼玉県・上尾高校の卒業生というのがある。答え。つまり、彼ら3人は互いに先輩後輩にあたるといっていい。その母校・上尾高校がこの夏